

第69回

会社訪問

佐竹化学機械工業株式会社

会社プロフィール

代表者：代表取締役社長 西岡 光利

所在地：〒335-0021 埼玉県戸田市新曾66（東京事業所・工場）

本社：大阪

TEL：048-433-8711 FAX：048-433-8541

設立：昭和13年3月1日（創業：大正9年4月）

資本金：9000万円

従業員：160名

事業所・工場：東京事業所・工場、大阪事業所・工場、
攪拌技術研究所、中部販売サービスセンター

関連会社：サタケ冷熱株式会社、佐竹(上海)貿易有限公司 など
事業内容：化学機械・化学装置の製造販売、攪拌装置・環境試験装置で構成された各種機械装置の製造販売など

URL：<http://www.satake.co.jp>



佐竹化学機械工業（株） 代表取締役社長 西岡 光利 氏へのインタビュー

聞き手：野村篤史（広報委員） 藏満邦弘（事務局長）

（編集協力：クリエイティブ・レイ株）

攪拌機国産第1号を生み出した老舗企業 “工業用攪拌機”を主軸に世界ブランドを築く

— 御社の主な事業内容をお教えいただけますか。

現在の当社の主な製品には、工業用の攪拌機、環境試験装置があります。売上に対して8割強を占めているのが工業用の攪拌機で、環境試験装置が2割弱となっています。

環境試験装置としては、冷凍空調機器性能測定装置やチャンバーなどがあります。冷凍空調機器性能測定装置とはエアコンやカーエアコンが、投入した電力に対して、ある設定温度でどれだけの仕事をするかを測るもの。エアコンやカーエアコンのメーカーが機器開発を進めたり、製品の工場出荷時に表示通りの性能が出ているか抜き取り検査をするときに使われたりします。一方、チャンバーはOA機器の環境試験をするためのものです。

チャンパーについては、以前は自社で製造しておりましたが、現在は日立製品を扱っています。自社製品の納入先が多くありますので、その交換機として扱うようになったためです。

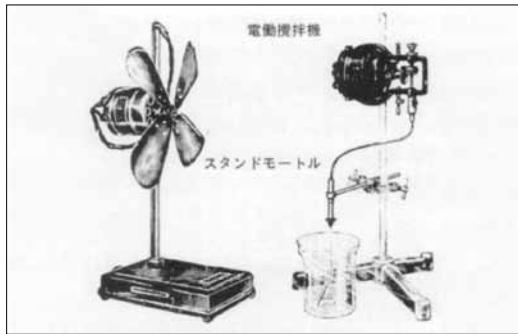
— 御社の創業は1920年（大正9年）であり、国産初の実用新案第1号となる攪拌機を生み出したとのことですが、このあたりの事情を簡単にお話しいただけますか。

当社の創業者は私の義理の祖父となる佐竹市太郎で、初め東京・銀座にあった理化学機器の輸入商社に勤めておりました。その後、働きぶりが認められて独立を奨められ、関西方面の顧客を引き継ぎ、大阪で創業することになりました。

当時、理化学機器は輸入品がほとんどでしたが、国産化をしようと、1926年に本格的に攪拌機の製作に乗り出し、やがて攪拌機実用新案の第1号となる佐竹式可般攪拌機が生まれました。それが軌道に乗り、さまざまな理化



初代社長 佐竹市太郎 氏



市太郎氏が試作した実験用攪拌機画

学器械を自社製造するようになったということです。

戦争を跨いだ話となりますが、30年程前までは乾燥機や恒温水槽をはじめ、幅広い製品を作っていました。特に乾燥機は有名で、化学プラントや電器工場が全国に作られた1950～70年代には、乾燥機はかなり売れたそうです。その後、製品を絞るようになったのが1990年代。いわゆる選択と集中ということで、現在の2分野となっていきました。

— 攪拌機などの製品は、主にどのようなところに納入しているのでしょうか。

攪拌機の主な顧客は、石油・化学工業、医薬品、食品などのメーカーです。最近では、水処理をするために使ったり、ナノ技術を扱っているところが素材原料を混ぜるために使うことも多くなっています。そのため、例えば攪拌機の試験タンクには、槽の形状を下水処理場に合わせた大型360m³の物もあり、処理場と同じ試験ができるようにしてあります。

— 御社には、埼玉県戸田市の東京事業所・工場と、大阪府守口市に大阪事業所・工場がありますが、どのような経緯でこのような体制になったのでしょうか。

大阪でスタートした会社ですが、戦後ほどなくして東京支店を開設。初代の市太郎が埼玉出身だったこともあり、昭和36年に戸田に工場が作られました。以来、東西2工場の体制で製造を行っています。東と西は富士川と糸魚川を境界線としており、50Hz地区と60Hz地区を区切りとして製造販売を行っています。

— 東京事業所に隣接して、攪拌技術研究所という施設をお持ちですが、研究所ではどのようなことを行っているのでしょうか。

攪拌に関する研究所としては、おそらくアジアでも唯一だろうと思います。この研究所には11名がおり、基礎と応用の両方の研究を行っています。基礎研究に関しては企業が行う範囲を少し越したところまでやっているという感じでしょうか。応用研究は客先共同研究や製品開発なども含めてやっていますが、モデルチェンジなどは工場の開発部門で行います。

— 韓国・台湾・中国など海外にも合弁会社があるようですが、特に中国などでのビジネスはいかがでしょうか。

海外での売上の比率は、現在10～20%です。以前は40%ほどあった時期もありましたが、韓国、台湾、中国に合弁会社を作り、今は現地供給しているため比率は減っています。

中国はどうかという質問ですが、答えとしては好調です。中国には上海と大連に工場があり、上海では冷凍空調機器性能測定装置、大連では攪拌機を製造しています。どちらも忙しく稼働していますが、どちらかといえば、エアコンメーカーの進出が積極的で、日系企業の設備投資も多く、冷凍空調機器性能測定装置関連はよく出ています。

— 国際的大競争時代に入りましたが、海外展開する上での成功の秘訣と申しますか、心掛けていらっしゃることは何でしょうか。

基本は、現地企業の経営は現地の人がやり、その国の人が豊かになるような経営をしてもらうということです。よく言うウィンウィンの関係を築くことです。

それと、分相応という考えもあります。当社から資本や人をポンと出したとして、それが万が一失敗するようなことがあれば、本体のダメージも少なくないでしょう。海外展開は、その両方を考えながら進めてきました。

— 海外の合併会社における、御社の役割はどのようなものなのでしょう。

私たち日本人が行っているのは、主に教育や技術指導などです。ですので、上海の工場も大連の工場も、日本人は働いてはいません。教育や技術指導ということで、現地従業員に日本に来てもらい研修を行うこともあります。

ただし、日本で製造した製品が売れないというのも困るので、高級品、つまり技術的に難しい製品は日本から持って行き、中国の販売会社を通して売っていかうと考えています。また、注意すべき点としては、日本の技術が一番でなければいけないということ。常に技術の先頭に立たなければいけないと考えています。

— 西岡社長の社長就任は2007年と伺いましたが、これまで経営者として強く印象に残ったことがあれば、お話しいただけますでしょうか。

社長就任後、最も印象に残るのは、やはりリーマンショックと東日本大震災です。リーマンショックにより、2008～2009年は受注が大きく落ちました。しかし、従業員の協力もあり、操業時間を調整しながら、多少赤字を出す程度で持ち越えることができました。そうして2010年は立ち直ったのですが、2011年3月には東日本大震災が起き、その後の計画停電、節電があり、就任期間の長さを考えると、大きい出来事が続けて起こったと感じています。

— 節電に対し、工場などではどのような対策をされたのでしょうか。

東京工場では、それまでピーク電力が290kWありましたが、震災後は最大電力を200kWまでとし、それ以上は上げないようにしました。同じく、ピーク電力を大阪工場は180kW、攪拌技術研究所は30kWに設定しました。さらに電力消費を示すメーターを取り付け、ピーク電力に近づくとアラームが鳴るようにして、電力消費を抑えました。

しかし、これによって無駄な電力を使っていたことが分かり、よい経験となりました。当社では攪拌

機を納品する前に、試験タンクで回します。例えば75kWのモーターを回すことになるので、ピーク電力を越えてしまうことがあります。そこで発電機を購入し、試験タンクで回すときはその電力を使うようにしました。こうしたことを現在も継続しており、コストダウンも図ることができました。

— 経営理念や経営方針などをお聞かせいただけますか。

経営指針として、当社では次の5つを掲げています。「伝統に基づく分相応の経営」「顧客の信頼を広げる体制」「販売や、コストダウンに直結する技術開発」「国際競争力の有る良品質製品作り」「従業員並びに系列会社従業員の生活の安定」です。

分相応ということで、当社は基本的に無借金経営。変な投資はしませんし、顧客密着の営業を心掛け、地道にやってきました。また、現会長であり、先代社長であった西岡茂が「ファミリー精神」を大切にしており、働く者の幸せを考えた経営を基本に据えています。



攪拌技術研究所では「いかに流れをコントロールするか」この永遠のテーマを追求



西岡社長（左側）の「ファミリー精神」がうかがえる工場風景



新型ポータブルミキサー・マルチ A ミキサー
左から A610 高速型、AN-G 中速型、A720 型（専用架台付）

— 現在、課題となっていることや今後の目標などをお聞かせいただけますか。

国内の製造業が空洞化していることもあり、今後も積極的に海外展開を進めていこうと考えています。これまでに海外に出たところはさらに育成し、そのほかの地域でも「攪拌機と言えばサタケ」と言ってもらえる、存在感のある会社になりたい。韓国、台湾ではそうなっており、中国はこれから育てていきたいと思っています。また、日系企業のアジア圏への進出が多くなっていますが、東南アジアを含めたアジア圏を商圏とする。これが今後の大きなテーマとなっています。

— 2010年は創業90周年にあたりますが、100周年に向けての抱負などはございますか。

現在、私たちは創業100周年を目指した大仕事に取り組んでいるところです。具体的には、東京工場のある戸田市の土地区画整理事業が進んでおり、それに合わせ、10年後の完成を目指した新工場の建設が進んでいます。そこには巨大検査タンクを持った検査設備や高度な要求に対する問題解決を図る実験研究施設なども備え、この新工場が完成すると、同一区画にすべての機能が集約する一大攪拌機製造施設となる予定です。

— 話題は変わりますが、西岡社長のご趣味はなんでしょう。

趣味は、と聞かれたとき、いつも「とりあえず、ゴルフです」と答えています。実際にはコースを回るより、メタボ対策で、ゴルフの練習場で体を動かしている方が多いからです。それとフィットネスセンターに通い、筋トレをよくやっていました。ただし、2011年の8月に肩を痛め、腕も上がらず、今は少し控えているところです。

もう1つ、趣味と言えるのは日本酒です。自宅には2畳ほどの大きさのワインセラーがあり、そこに日本酒をストックしています。日本酒はリラックスしたいときなどに、よく飲んでいきます。

— 協会に対してご意見やご要望があれば、お願いいたします。

意見や要望は特にはないのですが、あえて言えば、若い人の意見が通る組織であってほしいと希望します。日本全体を見渡すと、若い人たちの意見が通らなくなっており、こうした風潮には危機感を感じることもあります。その点、SJCはよい組織で、勉強会などで学び、それを足がかりに協会に参加し、やがて指導者へと育っている方も多いうように思います。今後も、こうした組織をより発展させていっていただきたいと思っています。

徳を目指して努力する 「仁」を信条に



当社には社長の信条というものが、初代社長の故佐竹市太郎は「和」、2代目社長の故佐竹満智子は「忍」、現会長の西岡茂は「誠」を信条としました。これらを踏まえて、私は「仁」という言葉を掲げています。一番の高位は徳で、徳になろうと常に努力を続けているのが仁だそうで、今の私には合っている言葉であろうと思っています。これからも、この言葉のように努力を重ね、人の道に外れない経営をしていきたいと考えています。